

(様式)

1/2

## 助成事業完了報告書

宛 先：日本財団

報告日付： 2010年 4月 13日  
事業ID：2008677499  
事業名：バイリンガル・バイカルチュラル  
ろう教育の実践研究  
団体名：学校法人 明晴学園  
代表者名：理事長 米内山明宏  
TEL：03-6380-6775  
FAX：03-6380-6751  
事業完了日： 2010年 3月 31日

事業費総額	5,362,588	円
助成金額	4,000,000	円

事業内容：（「何を、いつ、どこで、どのように」実施したのかを具体的に記入して下さい。）

昨年度に引き続き、「日本手話と書記日本語によるバイリンガル・バイカルチュラルろう教育」の研究・啓蒙をさらに進めるため、今年度は1.実践研究、2.指導者育成、3.ろう教育シンポジウムの開催等を通じて、明晴学園の教育を確立するために努めた。

本年度は研究テーマを「子どもが学校を作る～ろう児のリテラシー～」とし、手話と日本語の教科や単なる読み書きの力ではなく、世界を読み取り、他者に発信する力としてのリテラシーを育てることを目標と掲げた。

このテーマに沿って、本年度はろう児にとってのリテラシーとは何かを定義づけることと、言語能力の評価基準となる「手話」の分析を中心に指導者養成の研究会を行った。研究会の内訳は以下の通りである。

- 4月22日 「手話分析学入門」  
講師：手話教師センター（明晴学園講師）赤堀仁美
- 5月20日 「ろう児のリテラシーを育てる」  
講師：桜美林大学大学院教授 佐々木倫子先生
- 6月17日 「手話教材ワークショップ」  
講師：手話教師センター（明晴学園講師）赤堀仁美
- 7月15日 「NA教授法について」

- 講師：手話教師センター 数見陽子  
8月28日 各学部・研修会報告
- 9月9日 「ろう児のリテラシーを育てる その2」  
講師：桜美林大学大学院教授 佐々木倫子先生  
日本語教材開発について サントラスト社
- 10月2日 東京学芸大学附属竹早小学校見学  
「主体性を育む幼・小・中連携の教育」  
講師：東京学芸大学附属竹早小学校 彦坂秀樹先生
- 12月23日～24日 職員合宿  
(バイリンガル・バイカルチュラルろう教育シンポジウムに向けて)  
自主研修会「手話教師の資格」  
「ろう児にとっての日本語とは？」
- 2月24日 「バイリンガルろう教育の実践  
～カナダ ドゥルーリーろう学校の現場を踏まえて」  
講師：慶応大学教授 古石篤子先生
- 3月27日 「明晴学園 大家族会 子育てワークショップ」

バイリンガル・バイカルチュラルろう教育シンポジウムを次のような日程で行った。  
『バイリンガル・バイカルチュラルろう教育シンポジウム』

- 1月23日 記念講演「バイリンガルリテラシーを獲得するための二言語併用教育と  
発達段階にあわせた教育：  
バイリンガル教育と発達に基づく教育の理由と方法」  
講師：NIS（ニューインターナショナルスクール）学園長  
スティーブン・パール先生  
明晴学園研究発表「教科としての手話」「教科としての日本語」  
「幼稚部 絵本の読み聞かせ 模擬授業」  
パネルディスカッション 「ろう児のリテラシーについて」
- 1月24日 明晴学園 公開授業（幼稚部・小学部 クラス授業）  
研究授業（小学部 明晴学園商店街「子ども議会」）

今年度の研究は「子どもが学校を作る～ろう児のリテラシー～」と題し、研究報告書としてまとめた。シンポジウムの開催によって、読み書きできることが、ろう教育というこれまでの固定概念を払拭し、バイリンガル、マルチリンガルとして育つためには、それぞれの言語の十分なリテラシーを育て、言語の運用能力を高めることが必要であることを整理できたことは大きな収穫であった。

指導者育成事業では、1月28日から香港中文大学で行われた「アジアの手話言語学およびろう教育に関する研究大会」に明晴学園として研究発表を行った。最終日の全体討論ではろう児の教育にろう者がかかわる必然性とたいせつさをろう者の手話で訴えることで、「日本のろう教育もここまで変わってきたか」と、多くの研究者に深い印象を与えることができた。

また3月21日よりカナダ、ドゥルーリーろう学校を訪れた。カナダのオンタリオ州では、バイリンガルろう教育の実践を以前から行っており、指導方法や評価基準などの研究も進んでいる。またジョージ・ブラウン大学では、ろう者通訳、手話通訳養成などの課程を研修し、最先端のバイリンガルろう教育を肌で実感できたことは、これからの明晴学園の研究に大いに役立った。何よりドゥルーリー校で育ったろう者が、大学教員やろう学校の校長などあらゆる分野で活躍しており、明晴学園を卒業した子どもたちの将来像としても交流が有意義であることが明らかになった。

また中学部の教育課程については、2010年4月設立に向けて、手話や日本語の指導法などを精選し、明晴学園独自の教育課程を編成することができた。この教育課程については、文部科学省より特例校指定の認可を受けた。

ハード面ではパワーポイントや動画などろう児に適した視覚的教材をより見やすく活用しやすいようにプロジェクターを導入するなど教室環境の整備を行った。ソフト面でも日本語ゲームや手話ゲームなど、ゲームを通して楽しく言語運用能力を高めるための教材開発に力を入れ、パイロット版としてのゲームをいくつか活用できるまでになった。

事業目標の達成状況：（目標の達成状況、事業成果、成功／失敗の要因を自己評価して下さい。）

---

初年度は、手話と書記日本語で学ぶバイリンガルろう教育の教育方法や教育環境を整えることが最優先課題であったが、2年目の今年度は、明晴学園の教育はどうあるべきか、どんな子どもたちに育てほしいと私たちが願い、そのためにどのような研究が必要なのかに焦点を当て、研究を進めてきた。

ろう教育は、どうしても表面的な「言語」あるいは「読み書き能力」とらわれやすく、ろう児の全人的な発達が疎かになりがちである。そこで、今年度はリテラシーをテーマに、バイリンガルろう教育の実践研究をさらに深め、指導方法の確立と、教材・環境整備、指導者育成を本事業で行った。研究のテーマを絞ったことで、これまで以上に日々の実践に役立つ研究会やシンポジウムを企画することができた。

特に事業成果としては、シンポジウムをまとめたHPの作成と、研究報告書の発行は効果的であった。シンポジウムのHPでの報告は、当日参加できなかった人からも好評であったし、何より研究報告書は、明晴学園の教育を一冊にまとめることができたため、わが子をろうと診断されたばかりの保護者が子育てに迷っている時や、ろう学校の教員を志望する学生、手話サークルの人たちへの啓蒙等にも参考になる冊子となった。

2年間のバイリンガルろう教育の実践研究に関する事業により、「明晴学園の教育とは何か？」についてまとめることができ、指導者の共通認識を図り、共通の指針を出せたことは大変有意義であったと思う。その指針を評価基準として、子どもたちの発達の様相を知ることでもできた。今後はさらにそれだけにとどまらず、見過ごされやすい一人一人の詳細な発達の様子や、そのための支援の方法をよりきめ細やかに調査できるような研究を進めていきたいと考える。

事業成果物：（作成した報告書・印刷物・ビデオなどの名称、部数を記入して下さい。）

---

研究報告書『子どもが学校を作る～ろう児のリテラシー～』

学校案内資料

HP作成